



営農支援情報

田植え前後の栽培管理

1. もみ枯細菌病・苗立枯病について

もみ枯細菌病は、発生条件が異なる**苗立枯病**とともに**育苗期間中の温度管理**が重要※になります。育苗ハウスの開閉により適切な温度を保ちましょう。また、無加温出芽の場合、もみ枯細菌病の発生を助長しないよう出芽状況を確認し、被覆期間を過剰に長くしたり、出芽後の再被覆を行わないようにしましょう。

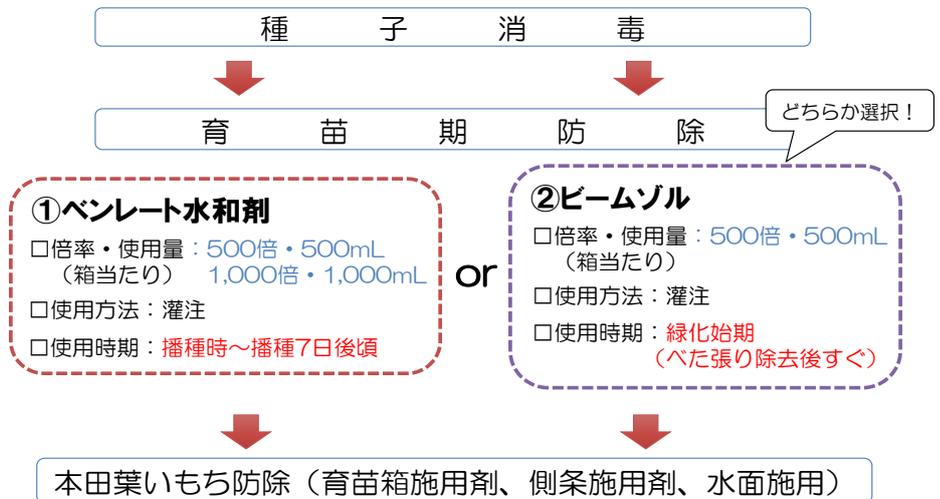
※種子消毒や土壌消毒を行っていることが前提

2. いもち病対策について

いもち病は“圃場に持ち込まない”ことが重要です。種子予措から葉いもち防除をしっかり行い、本田での発生を予防しましょう。

稲わらや籾殻にはいもち病菌が付着している場合があります。育苗ハウス内に野菜の苗等を置いている場合も、保温のための稲わら敷きや籾殻使用は避けて

ください。ハウス内の通風をよくし、過湿にならないように、かん水は午前中に行うようにしましょう。



余り苗はいもち病の発生要因となり、周辺圃場への伝染源となるため、畦などに放置せず、土中に埋めるなどして速やかに処分しましょう！

3. 初期分けつの確保について

①栽植密度は70株/坪とし、深植えをしない

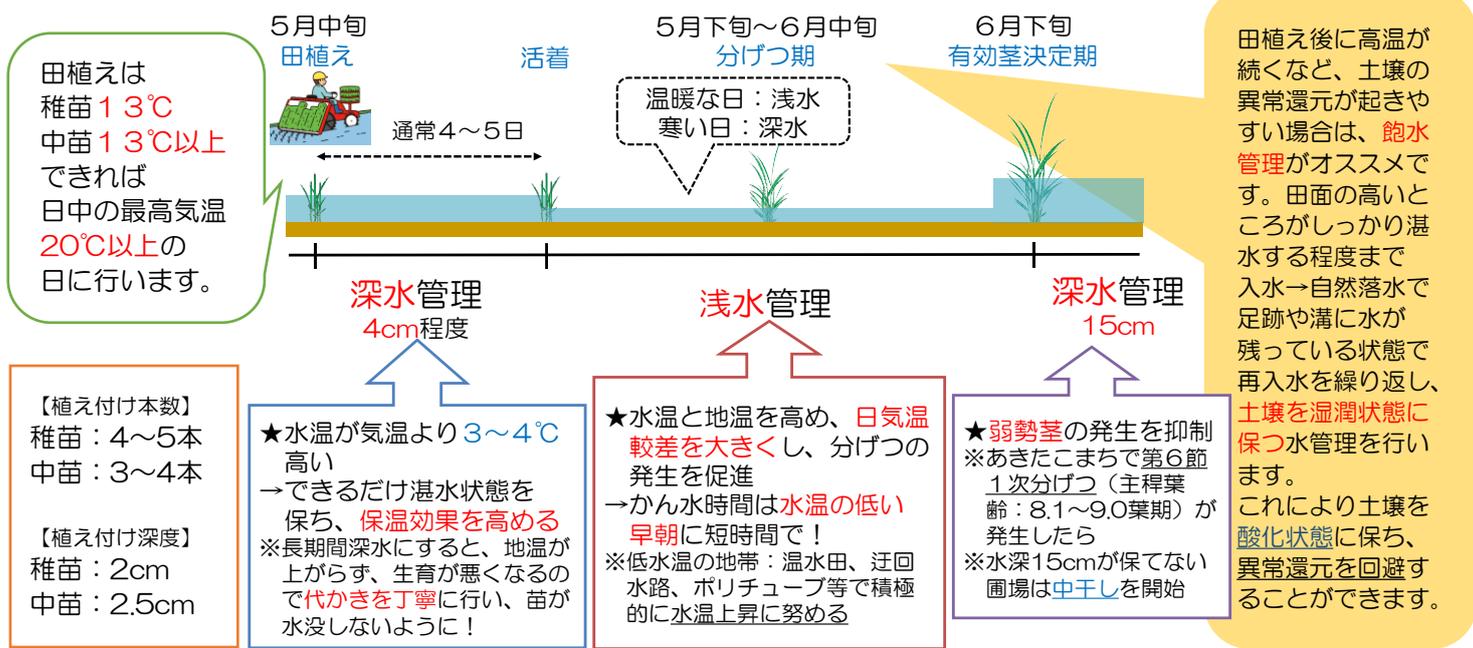
- ・第3～6葉までの低次・低節分けつを確保し、有効茎歩合を高める
- ・活着促進のため、植付深度は3cm以下にする。

②最新の気温予報を活用し、水管理を工夫する

- ・秋田地方气象台では、「2週間気温予報」を発表しており、常に最新の気温予報を確認することができます。※気象庁HPの「2週間気温予報」ページを参照ください。

2週間気温予報 (気象庁HP)
<https://www.data.jma.go.jp/cpd/twoweek/>

4. 田植え後から活着までの水管理について



5. 除草剤の選択・散布について

現在では田植えと同時期から使用でき、残効が長く、幅広い草種に効果がある初中期一発剤が広く使われていますが、除草剤を上手に使うには、発生する草種・量に合わせて剤を選択することも大切です。

例えば、ノビエなどの種から発生する一年生雑草の場合、発生時期が早いため、**初中期一発剤や初期剤+初中期一発剤の組合せ**で、初期の防除に重点を置くと良いでしょう。

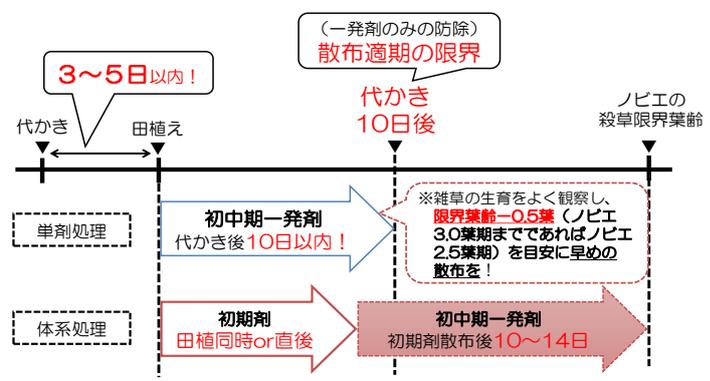
一方、オモダカやクログワイなどの塊茎から発生する多年生雑草は、発生期間が長いため、初中期一発剤だけでは防除が難しく、**初期剤や中後期剤との組合せ**が必要になります。

また、ホタルイに特に効果が高い！など除草剤の成分によって得意な草種も異なります。

どの剤を選択したら良いかわからない時は、最寄りのJAや指導機関へ相談に行きましょう！

【散布時のポイント】

- 代かきを丁寧にを行い、圃場の均平に努める
- 散布時は**深めの湛水**（浅いところでも**3cm以上**で、散布後3日間は湛水状態を保つ）
- 河川の水質保全等を考慮し田植え前に初期剤を使用しない
- 除草剤散布後は**7日間止水**しかけ流しや落水は行わない
- 前年残草した雑草の種類に応じた除草剤の選択を！
- 省力製剤（ジャンボ、フロアブル、豆つぶ等）や、ドローンでの散布などもうまく活用して省力的に！
- 表層剥離やアオミドロは、除草剤の拡散を妨げる



営農支援部 営農支援課 ☎018-880-1011